
おれはまだ本気をだしていないだけ～きっと第2、第3の封印があるっ！…はず。

ソバット

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おれはまだ本氣をだしていいだけ~きっと第2、第3の封印があるっ!~はず。

【Zコード】

N7407Z

【作者名】

ソバシト

【あらすじ】

おれは無力だ。
だから流されるままに生きる。
でも、信念はある。

『生きることは素晴らしい』と信じること

孤独の海に沈んでいたおれを、人間に絶望しかけていたおれを、救ってくれたきみが笑つていつたことば。

あんなにもきみを突き放したのに…。

きみが一番悲しかったはずなのに。
それだけは突き通す。

たとえ無様でも。

逃げて、抗つて生きてやる。
どんな運命であろうとも。
叶うならきみのようにいきたい。
だけどおれは俺だから……

注・この小説は、魔法少女リリカルなのはの一次創作です

proto-type 聖なる夜にて（前書き）

注：この小説は、魔法少女リリカルなのはの一次創作です。
小説を書くのは初心者です。他の作者の方々に啓蒙された読み専
すのでテンプレになるかもしれません。

初心者ですので、小説としての体裁を取れていない部分等、問題点、
矛盾点が多々含まれると思われます。以上の点は予めご了承してい
ただければと思います。

prologue 聖なる夜に

はあ・・・・・。

思わずため息が漏れた。

「ひへる、どうしたのかな。妹様に言つてみな。」

「うるさい、あんたのほつが年上だつが。それに俺の妹は1人だけだ。」

「この世界にはいながな…。」

「ぐひや、ちがうもん。肉体関係はそつだもん。」

「精神的におまえが妹だとは身体が受け入れん。」

町から数キロ離れた海面に、それは傍若無人に鎮座していた。

周囲との調和を完全に無視したその光景は、町の住民が見れば空いた口は塞がらない代物である。

いくら結界が張つてあるとはいえ、この管理外世界　地球で魔法を乱舞させるなんて正気の沙汰とは思えない。管理局的にありだとしても、この国の法律は余裕で破つている。

自分たちの法さえ破つてなければ……それでいいのか管理局う。

コレだから偽善者集団は・・・、ヘタなカルト教団よりたちが悪い。

その個人の価値を優先する振る舞いに、思わず殺氣があふれるそれでも組織と言えるのだろうか？

そして繁華街のおかしなくらい静かな街中、そこで俺は腕を絡めてくる義妹を適当にあしらいながらため息をつきたくなる。

「それは近親相姦バッヂーいといこう」とかな？

俺が義妹に押し倒されている非常識な事態に陥つてゐるとき、海

面では、常人¹」とが想像できる範疇を遥かに超えた非常識が展開されている。

例えるなら、怪獣大決戦。

一方は魔力と物理の複合四層式^{主に魔法少女系}の防衛プログラムを持つ触手やらなんやらがうようよしている18のつくゲームに出てきそうな化け物。

肉眼で見れば背筋が凍り付きそくなぐらいに不気味だ。

どれくらい不気味かというと・・・カタツムリの殻をつぶしたときくらいか？ - - - したことある人いる？ほんとあれはない。

一方人間はとにかくたくさん。お約束だな。

だがお約束は数だけ。人間側は”質より量”であるべきなのに、

「人間側、強つ。怪獣なむ。」

こういう場合はBランクの魔導師が多数と少数のAランクでありますに、一人一人がA A A Sニア Sランクは卑怯だ。

まさにフルボッコ。

よくあるラスボス的終わり方だねww

心情は怪獣の味方（笑）をしつつ、だからといって介入するつもりもなく傍観に徹するのは行く意味がないから。

俺一人が怪獣の味方をしてもあの戦力差では勝敗が目に見えている。怪我をしている身体じゃ、ねえ。

状況は終始人間側の有利にあった。

忌々しい守護騎士たちに、彼女達に一步譲るものの充分な実力を兼ね備えたおよそこの小さくなつた身体と同年齢の少女たち。

だが、それ以上に目を引くのは、

「・・・能力持ちの転生者か。」

やはり少女たちと同年齢の二人。

しかしあれはなんだ？

人間の魔力保有臨界点ぎりぎり。

魔力はうまく高速運用し、痛々しくネタワザを叫びながら触手怪獸をぶつ飛ばす。

『怪獣ー！もつと頑張れ　ｗｗ

18的な感じに引っ張れよーー』

と同情を禁じえない感じだ。

とにかく人間業じやない。

放たれる砲撃が空間に干渉するほど威力は、おそらく現代の技術で作成されるデバイスでは不可能だ。

ロストロギア。おそらくそれだらう。

「やつぱり手伝いいらなかつたね～。わあ、はやく帰つて子作りを、ヒロ。」

もう、いいやこいつスルーで。

「せつかくの聖夜なのに……覚えてないのかな？ヒロ……。」

少女とその2人がトドメとばかりに叫んだ巨砲で怪獣は完全消滅した。

まとわり着いてくる義妹を振り払う。

一キロ先の海面から田を放し、俺たちは結界の外へと向かった。

銀細工のリングネックレスを握る。

今の俺の心のようじこぶ。

どこか遠いところの風梨へ、お兄ちゃんは今日も頑張ってなんとかいきます。

ただひとつ望むことは、この変態をどうかしてほしこです。

真操の危機を感じます。

切実に…

proto 0.0.0-1~聖なる夜にて (後書き)

最低1ヶ月に一回は更新できるように頑張ります。

episode1&1t・自称妹がかわいいと思えてきた俺はやばい&やばい・

駄作ですがよろしくお願ひします。

私立聖祥大付属中学校。

今日はその入学式だ。

まあ、エスカレーター式の進学校だからそこまで特別といつわけではないが・・・。

「ヒロ、今年も同じクラスだといいね。」

「はいはい、分かったから。

こいつは皆本 香澄。

自称 妹様の双子の妹になるのかな? - - 全く似ているようには見えないけど

「・・・手を離してくれないかな?」

「そう、今俺はこいつと手をつないでいるんだ。

タダでさえ白い目で見られるのに、兄妹だと知られた暁にはさら
に視線が突き刺さるようになる - - 余談だが自称妹様はすごいかわ
いい

しかし、10年間この状態を保ち続かされてきたおれのスルース
キルなら大した問題ではない。

本當だよ!べ、別に最近ふくらんできたうでに当たる慎ましい胸

が気持ちいいなー、とか思つてないからな。

「朝からおあついね～、おふたりさん 」

「うわこ、去ね。ね～ヒロ。」

いや、俺に同意を求められても・・・

俺たちに声を掛けってきたこいつは斑鳩いかるが 良介りょうすけ 自称平凡な人間じめい、絶対に違うと思つ。

こいつといふとよく姉妹だと間違えられる。なぜ俺が妹になる、解せぬ。

「ひどいね～、じゃあ一人とも後でクラスでね～！疾風のようになつていつた、朝から元気だよな。

突如、背筋に悪寒が走つた。

隣のかすみをのぞき込むと青筋を立てて震えていた。

無表情でそれをやらないでください、かなり怖いんですけど。

「斑鳩、あいつ殺す。ヒロと一緒にクラスになれるか、1週間ワクワクしていたのに。ば、ばらしやがって・・・」

さいですか、

・・・愛が重い。こいつ。いつからこんなんだつただろうか、

昔はもつと可愛かったよな、純粋で。

良介、なむ。

黒くなっているかすみはスルーで。

これははさすがに俺でもどうにもならない、良介責任を取つて死んでくれ。

線香一本くらいはあげるから・・・。

まあ一応、掲示板くらいは見とくか。

おお、あつた。

B組

アリサ・

斑鳩 良介

桂木・

高町・

月村・

フェイト・

皆本香澄

天馬・
ハ
神
ベガサス

俺

ふむ、どうやらB組のようだ。

しかしなんだ、原作キャラ纏められているな。

まあ、正体がばれなければいいだけだけど。

魔王の砲撃だけは喰らいたくねえし。

で、着きました教室。

知ってる奴いないな。良介はかすみに追いかけられている。

まあ、学校に友だちなんて片手で数えられる程度だけど、だけど

・

基本、広く浅くの関係を望んでいるからな、俺。

あ、良介たちは昔に関係で例外。

原作キャラもまだ着てないようだ。

俺はM Yデスクの場所を確認して席に着いた。

場所は窓側の一一番後ろ。春の穏やかな日差しが心地いい。

俺は席に着き、鞄からある物を取り出した。

ふむ、朝はこれがないと。

るのは sides

今日から新学年！！

わたしは新しい出来事を楽しみにしながら、バスに乗った。

「お~い、なのよ~」

「あ、アリサちゃん...」

「おはよー、なのよ~」

「アリサちゃんとすずかちゃん、おはよ~」

「おはよ。あれにしてもなのよ、なんか楽しめ~」

「うん、だつて新しいクラスだよ~楽しみに決まってるよ~」

「こっしょのクラスになれるとい~ね」

「うん...」

わたしは親友のアリサちゃん、すずかちゃんと共に学校へ向かいました。

「なのはつ

「フエイトちゃん、おはよつ」

学校に着くと、校門前にフエイトちゃんがいました。
どうやら、わたし達を待つてくれたみたいなの。

「さて、クラス分けを見にいきましょ」

アリサちゃんの一聲で、私達は学校の掲示板へと向かいました。

「うわっ、人が多いわね…」

「しようがないよ、新学期なんだし。もう少し早く来ればよかつた
ね。」

掲示板前の人ごみを見て、アリサちゃんは凄く嫌そうな顔をしました。

わたしあの中に突入する勇気はないの・・・。

モーゼのよう人に混みを分けて掲示板の前に行く変な男女の二人組がいたけど、すごいの・・・でも女の子から出る黒いオーラ、あれは魔力?

「よう、みんな」と、わたし達が困っていると人ごみから1人の男の子が近づいてきました。

「天馬くん、おはよ」

「おはつ、」

天馬君は唐突に話すのやめてフェイトちゃんの方を向く、またなの。
思わずため息が漏れそうになる。

「フェイトさん、結婚してください！？」

「えええええええ！」

「フェイトを困らせんじゃないわよ」ドゴシー！

「ふぎやあー！」

アリサちゃんに殴られた天馬君は、きれいに半円を描いて吹っ飛んだ。
「痛そー。」

アリサちゃんも手加減しないなあ。

「大丈夫、天馬君？」

「…………な、なのはすまない…………」

天馬君は差し出した手に掘まり、なんとか起き上りました。
でも『『ふざやあ……』』って。
わ、笑つちや駄目つ、耐えないとつ。

「…………なのは？」

「なつ、なにつ？」

柔らかな顔でわたしを見つめてくる天馬君。

「あ、あのな「おはよつ、なのは（）（）（）」」

「あ、うん、おはよつ」

天馬君のこねは駆け寄つてきた男の子にかき消された。
来たのはアリス君。

キレイな金髪と中世的な顔立ち。
色の違う不思議な瞳。

向けてきた笑顔は、なんだか絵になります。
けど、わたしは何故か寒気を感じる。

「なのは、今年は違うクラスだね…………」

「やつ……」

「やへへひついたの、なのは?」

「や、やだね? べ、別のクラスなんて~」

「やうだね……」

あぶない…

思わず喜びそうになっちゃつた。

アリス君は寂しそうだけど、わたしはちょっと嬉しい。
だって、アリス君つてちょっと嫌いだから。

「でも、なのはは他の畠と一緒にだから安全だね。僕も昼休みとかはB組に行くから」

「え……。あッ! ? うん是非! !」

やつぱ、昼休みも来る気な……。
と、わたしが気落ちしていると、天馬君がアリス君に声をかけました。

「なあ、おれは何組だった?」

「なのは、何かあつたら呼んでね? 直ぐに駆けつけるから」
「あ、うん」

「なあなあ、だからお~」「それじゃあ、そろそろ行くね? また後で

「

アリス君はそう言って、校舎へと歩いていった。

無視されていた天馬君は、無表情で「もう慣れたけどな」と笑っている。

天馬君から少し黒いオーラが流れている、天馬君かわいそつな。

そういうところが嫌なんだけど？アリス君。

わたし達はクラス分けを見に行かず、教室へ向かった。

天馬君はクラス分けを見に行くらしい、人混みに飛び込んでいった。わたし達が確認しに行かないのは、単にネタバレされたから。他の皆も不満そうな顔をしている。

そうだよね。クラス分け確認するのも楽しみだつたんだもんね。

「で、でも、またみんな同じクラスでよかつたよ！」

場の空気に耐えられなかつたのか、フェイトちゃんがわたし達に言った。

「そうだね、みんな1年間よろしくね

「そうね、こんな空氣じゃやつてられないわ。みんな、またよろしく

「く

「うん、また楽しい一年になるよ、あひとー。」

私達は新たな1年に期待を寄せて、教室へと向かった。

「…もういえばはやてちゃんは何処に行つたんだろう?」

episode2 『俺の華麗なる朝』

「桂木の敵を討たせてもらひつよ、」の凶剣斧【白翻】で

「あんたはあん時のー。」

ビクッと体をふるわせる狸。

「なんど、今思つ出すとはー。」

俺はそんな思考が鈍つた彼女を見、更に怒りを爆発させた。

「やあ、俺と貴様は運命の赤い糸で結ばれていたようだ。——
一復讐と言つな・・・」

今、確信した。

「闘つ運命にあつたー。」

全身の体重を乗せて振られた漆黒爪【終焉】をバックステップで避けたおれは、あわてて体重を戻すとする子狸を凶剣斧【白翻】でなぎ払う。

「ぐはつー。」

「よつやく理解したー。」

俺の攻撃は都合良く止ませはしない。一気に攻め立てようと小狸の腕を両断するため、袈裟斬りに戦斧を走らせる。

それをただ待つほど小狸も愚かじやない。バツクラーで受け止める。

「俺は貴様の圧倒的卑劣さに堪忍袋の緒が切れた！」

火花の如く散る視線の中で俺は宣言する。

「この気持ち まわしく・・・・・・にくしみだ。

——だが、俺は考えた。もし貴様が今この素材を剥ぎ取らせて貰ふたら許してやらないでもない——と

「そんあつ提案をしておきながらー。」

吼えよ、子狸。

「なぜ戦うー？」

今度は子狸が聞合つをつめ、すかさず剣を振るひ。

「ふつ、」

、が俺はそれをやすやすと受け流す。

“ロココノ”に戦いの意味を問ひとほーー懸か。ナンセンスだなー！」

「貴様は歪んでこる」

「俺は悪くねえっ！ 先生がやれって言つたんだ。そりだー先生が悪いんだー！」

俺にロリィのよさを教えた先生がわるいんだー！」

「むねに貴賤はなしやで」

「や、それは世界の声だよー！ でも

・・・・・わつわざ至高だ

「嘘だつー！」

八神はやて
子狸が言つてゐることは詭弁だ。

腰を卑くバンギス装備にしたい次いでに戦いたいといつ欲望を正当化するための虚言にすぎない。

「あなたは自分の欲望を押し通してこるだけだー！のその歪み、このわたしが断ち斬るッ！」

「よく言つた子狸ー！」

お互に距離を取つて様子を伺うだけであつたが、俺の咆哮を皮切り

に、俺たちは同時に置を蹴った。

「やああああああああ！」

喉を引き裂かんばかりの怒声が轟き、元の剣を振り下ろそうとする。

が、それよりも早く

クエストが終了した。

俺たちは目の前が真っ暗になつた。

episode 2 『俺の華麗なる朝』（後書き）

へんなテンションで書いてほんとすこません。

モンハン、ギヤンダムその他もう適当に憲^{せん}ぜています。

桂木といつのは転生者である落とし神の物語とは関係あるかは、紙のみぞ知る。

作者に余裕があつたら番外編のほつに乗せたいです。

感想などをいただけたら嬉しいです。

（ Nanoha sides ）

あ…ありのまま 今 起こつた事を話すね！

「わたしは何事もなく自分の席に着いたと思ったたら隣にいままでいなかつたはやてちゃんと、知らない男の子が2人溶けていた。」

な… 何を言つてゐるのか わからぬといつけば。

わたしも 何が起こつたのか わからなかつた…

頭がどうにかなりそうだつた… 夢や幻想だとか

そんなチャチなもんじやあ 断じてない。

もつと恐ろしいものの片鱗を 味わつたの…

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

誰か呼ぶべきかな。

・・・・・・・・・・・・・・

ピクッピクッ。

なんかピクッピクつゝこぐるよ、これ。

一気持ちわるつ！

失礼かもしけないけどこれはきもいつ。

でも何故か目が放せない。
これどうなつてんだろ？

触つてみようかな・・・。
いやいやいや、チョット待て。
触つて大丈夫なのかな？
なんか膨れあがつてきてるし。
ん？膨れあがつて？

～主人公 side～

うつ、くそ。

狸め。

平等にはぎ取るつて約束したのに。
裏切りやがつて・・・。

まあ、そろそろ起きようか。

あと1回くらいトライできるだろ。

おれのアバターふっちゃんに暴食竜を装備させるんだ。

それにしてもこのモン ターハンター。

アバター設定。身長とか体型とかももつと設定させてくれないかな。
足は太いし、腰太いし。

俺としてはもつとスレンダーでちつちさい方が・・・。

体をあげる。
ん?

サイドテールでネ「田の美少女がいた。

田の前に、その距離およそ5センチ。

「ぎやああああああ――」

「ぎやあ。」

神様、仏様、シユテル様。
どうかお許し下さい。

別に下心が会つたわけではないんですよ。

ただ顔を上げたらまたまこうなつただけで。

故意ではないんですよ。

即座に俺は土下座を実行した。

『きやあ』？

いつもなら顔を真っ赤に怒らせて砲撃を放つてくるのに？

おかしい。

こんな所にいるのはあり得ないとまでは言えないがおかしい。

ここは中学校。

私立聖祥大付属中学校。

ま・・・まさか。

そこにいたのは。

オリジナル。原作キャラ。

主人公、砲撃魔 高町なのはだった。

いや待て、まだ大丈夫だ。

別になんにもばれちゃいない。

でも、この状況どうじょうづか。

俺が叫んだモンだから周りの注目を集めている。

片や美少女、片や女顔のフツメン。

やばいな、絶対おれがなんかしたと思われる。

世界は平等とか言つてもなんだかんだで外見で差別される。つまり見た目で判断される。

俺が悪いとされるのだ。

入学早々災厄のスタートだ。

逃げようか、よし逃げよつ。

50メートル6・1の俺の足なら逃げ切れるはず！！

しかし俺が教室から出る」とはなかつた。

episode 4 『俺の華麗なる朝』 3 (前書き)

投稿しますた。

2012/01/04

（放課後）

そう放課後である。

あれからどうしたかって？

まあ、ただ。

なのは（暫定）の悲鳴をきいて駆けつけた金髪の美少女――え
つと、ばーにんぐ？ だつたかーーが全力逃走している俺の袖をひい
た。

俺は足を滑らせてこけた。

打ち所が悪かったのか気を失った。

クラスメイトが保健室へ搬送。

田を覚おおと入学式も「エラ終」。

原作キャラと思われる集団が謝罪に。

別にこことここと、やんわりと帰るよしあすめるが食い下がらない。

そのとき保健室の扉がバンとこきおこよく開けた、俺はこれからおれる面倒ごとに頭を抱える。

すじい形相の香澄が俺に飛び込んできた。

俺は妹をたしなめた、原作キャラ一同はほつけた顔に。

妹は回りに『氣づくべ、そして金髪美少女を見て顔をゆがめる。

殴りかかろうとする香澄、事前にそれを予知していた俺は阻止。

どこで、ヒロ。そいつが殺せない！

仕方なく身長130cmの小学生にしか見えない暴れるちいさな

妹様を小脇に抱える。

とても香澄を抑えられないの、そのままダッシュ。
呆然とする原作キャラ一同。

校内を歩きながら、帰途につく。 今ここ

「ヒロ、なんであいつ殺しちゃいけないの？ヒロを殺すもんにした
の！」

「じゃなとこで殺しまさずいだる、絶対むやみやたらに殺すなよ。

」

「でもヒロ。

「でもじゃない。それにあいつら原作キャラなんだろ、確信ないけ
ど。」

「うんそうだよ。一人、余分なのがいたけど……。」

やつぱりあの中にいたか、イレギュラー。

どんな能力を持つてているのだろつか……。

今まであつたイレギュラーは戦闘系、生産系と差異こそあれ何らか

転生者

の能力が与えられていた。

……こそ、俺も欲しい。

とにかく転生者^{俺以外}は総じてみなスペックが規格外だ。

計画のじやまにならなければいいがな。

「殺しちゃダメ?」

「う、ダメだよ。というか何でそんなに殺したがるんだよ。」

「わたしのヒロの害になるかもしないから…。」

「ダメだ!」こつ早く何とかしないと。

「強いかもしれないし、仲間になるかもしないだろ。」

「……そうだけど。じゃあ、アリサ・バーニングスは殺していいよね。」

「だれ? ?

「誰、アリサ・バーニングスつて。」

「ヒロ殴つたぶれいもの。」

ああ、原作キャラか。確かにそんなのいたな。
最近記憶があいまいだな…。

「ダメだよ、原作キャラだめっていってるじゃん。」

「でも、あいつ。2期以降モブだし、出番ないし。
作品によつてはレイプとかされてソクソク脱落するキャラだよ。」

いやいや、それでもだめだ。

それに脱落？死ぬのか？あいつ。

まあ、その辺は自称正義の味方がどうとかするだろ。

「だめだ、原作キャラだろ。」

「じゃあ、よぶんなのをけしていくね！」

「だからだめだって。」

話し通じねえ。

無限ループだよ。

「こいつほんとビリしてこうなった。
そんなに誰か殺したいのか？」

教育間違ったかな？

episode 5 『俺の平凡な日常』

桜咲くこの季節。

心機一転。何かを始めたりするのにちょうどいい季節。

小学生と中学生、入学したばかりの俺たちにとつては大して違いはないが進学するとその世界観は否応なしに大きく変わる。

特に新入生はこの時期何かと忙しい。

私立聖祥大付属中学校。

大学にも繋がるマンモス校だ。

中学生から部活に熱を入れる者也非常に多い。

入部は強制ではないが、手芸は文芸も体育系も豊富。

部活自体人数が5人以上いれば承認されるため訳の分からない分も非常に多い。

なんでも過去の生徒会がマニュフェストを実行した結果らしいが、よくは知らない。

——唐突に何故こんな事を話したかといつと。

勧誘が凄まじいのだ。

特に体育会系。

マイナーな競技や、マイナーな武術同好会など。

メジャーな競技だつたり、文化系の部活だつたりしたつたり割とかんたんに部員が集まるのだが、つまり必死に勧誘しないと誰も入つてくれないので。

勧誘を避けながらだるまつに歩いていると、隣を歩く香澄（妹様）が話し掛けてきた。

「ヒロは部活にせこいの？」

「……急にせした？」

「いや、なんとなく。みんな何処に入ろうか話してたから。

「で。俺が入るとしたら何処にはいるのだろうか、と。」

「うん」

小首をかわいいらしくかしげる香澄。

「トース部かな？」

「もう言へばヒロは前、やつてたんだよね。」

「ああ、といつても弱かつたがな。才能ないし。」

とこりかテニスは最も技術が必要な競技だと俺は思つんだ。

「香澄はどうなんだ。」

「私は手芸部かな」

手芸部か。

なかなかに似合つてこるのは思つがもつと運動的な部活が好みだと
思ったのだが。

「この学校の手芸部す」こらしこんだ。
なんでもこの辺の掃除を担当しているんだって。」「
……掃除？

「掃除つて何だ。」

手芸部つて裁縫とかする部ではないの。」

「うん、それもあるけど。

夜の町に駆け出して社会のゴミを狩るんだって。
部員はなにかの武術を納めているらしいよ。」

なにそれ怖い。

なんか進学校の闇を見た気がする。

「「まあ」」

「「俺たち（私たち）は部活なんかはいれないけど。忙しいし。」「

渴いた笑いしか出でこない。

せつかくの一回田の青春なのに仕事だけで終えてしまつなんて。

もつとも時間があったとしても、いまさらスポーツなんて楽しめないだろうが。

根本的な肉体のスペックが違いすぎる。
なんか変わってしまったことを改めて実感してしまって少し悲しくなる。

まあ、今日も一日がんばろうか…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7407z/>

おれはまだ本気をだしていないだけ～きっと第2、第3の封印があるっ！...は

2012年1月14日20時58分発行